

# 保育士養成校における音楽教育の意義

— 子どもの心身の発達と音楽とのかかわりを踏まえて —

鈴木 恵津子

## The Significance of Music Education in Teacher Training Programs

— Based on The Relationship between Children's Mental and Physical  
Development and Music —

SUZUKI Etsuko

The number of music subjects will be cut down in a new curriculum starting 2002. Music has great effects on children's mental and physical development.

Nursery school teachers are responsible for helping development of children's music ability.

In this paper, I discuss the importance of five aspects of music education in teacher training programs: The role of music activities, The function of music, Development of young children's music ability and day care programs, Young children's music activities, Teachers' music ability.

### Keywords :

Teacher training programs, Young children, The function of music, Music education

保育士養成校 乳幼児 音楽の機能 音楽教育

### 1 はじめに

保育士養成校<sup>1</sup>においては、保育士養成課程等検討委員会からの報告<sup>2</sup>に基づき、2002年度から実施される新カリキュラムによって「音楽」に関する科目が削減<sup>3</sup>される。ここで、保育士養成校における音楽教育の重要性について改めて考えてみたいと思う。

音楽専門の学生ではないので、当然のことながら、高い技術追求が目的ではない。自ら音楽を楽しむ、音楽を通して子どもたちと豊かな心の交流を持てる保育士を育てることが、我々の役割であ

ろう。

多くの保育士養成校においては、音楽に関する科目は、ピアノ、声楽、音楽理論、リトミック、オペレッタ等が開講されている。新カリキュラムに従い、本学児童学科においては、「音楽①」を必修2単位とし、他に取得免許に応じて、「保育内容研究・表現」2科目、「音楽表現」1科目、合計6単位を必修選択科目として開講している。その他に、コア科目の中でいくつかの講座が開講されることもあるが、基本的には先に挙げた4科目、8単位の中で音楽の基礎理論・技術等を習得

しなければならない。単純計算で、ピアノと音楽理論を半年でマスターし、声楽も半年で仕上げる。そして、残りの2科目の時間内でリトミック、オペレッタを始めとする音楽表現、教育楽器による合奏演習、手遊び等の音楽遊びも一通り学ばなければならない。この計算は学生たちが最大限履修した場合である。

保育士養成課程検討委員会報告による「保育士養成課程案」の内容に従えば、必修科目「基礎技能」の演習2単位の中で、ピアノ、声楽、音楽理論、簡易楽器の扱い等をすべてこなすように書かれているのである。

ピアノ等、音楽の個人レッスンを受けた経験のない学生にとっては、講義時間が少なくかなりハードなカリキュラム編成になっている。また、多くの課題を短期間にこなすような詰め込み式では技術習得に限界がある。技術演習をともなう音楽科目はできるだけ長い期間、継続して学ぶことが望ましいと言える。何より、「音楽」が「音が苦」にならぬようにしたい。

本稿では、子どもの心身の発達と音楽活動とのかかわりについて述べる。その中から自ずと保育士の役割、保育士養成校における音楽教育の重要性が明らかになるであろう。

## 2. 音楽活動の意義

音楽を人間活動として捉えるなら、音楽の起源について語るには、人間がいかにして音響を音楽的諸機能のために使うようになったかを考えなければならない。

音楽の起源には様々な説がある。ダーウィン派進化説(Darwinian theory)は、音楽が、動物たちの交尾の呼び声のような性的本能とともに発展したと言う。そして、レヴェスのcalling signal theoryと呼ばれるコミュニケーション説(communication theory)。カール・ビュッヒャーの労働起源説(work song theory)。音楽が舞踊との密接なかかわりから発展したというリズム起源説(theory of rhythm)。レヴェス等も認めている模倣説(theory of imitation)等がある。<sup>4</sup>

正に、人間の生活は古代から音楽と深い結びつ

きを持ってきた。戦いの合図として使われる太鼓や角笛。狩猟の呼び声、収穫の喜びを表す歌や踊り。音楽は原始的な伝達手段として始まり、人間の本能的な感情の表現として使われてきた。

現代においても、我々の周囲には音楽が満ち溢れ、生活と音楽は切り離せない状況にある。それゆえに、無理やり聞かされる多くの騒音にストレスを感じることもあるが、快い音楽は疲れた心を癒し、励まし、生活に潤いを与える。また、音楽を通しての感情表現は、言葉の違いや年代を越えて互いに理解し合えるものである。

また、水のせせらぎ、木々のざわめき、風のささやき、小鳥のさえずり、蝉しぐれ等、自然の中にある音素材こそが音楽の心根であると考ええる。古代における様々な音楽活動は、これらの自然の音を模倣することから始まったに違いない。

音楽活動は自然や生活とのかかわり、人間同士のコミュニケーションの上で大切な役割を果たしてきた。そして、心身の成長発達が一生のうちで最も著しい乳幼児にとって、本能的な感情表現として使われてきた音楽は、心豊かな人間に成長するためになくてはならないものであると言えよう。

## 3. 音楽の機能

音楽には、次に挙げる5つの機能が考えられる。それらは、子どもの成長にとって大切な役割を果たすものである。

### (1) 聴く能力を高める

「聴覚」は、人間の五感の中で最も早く発達する。生まれる前から、母親の胎内で音を認識していると言われ、乳幼児期は、「聴く」ことによって諸機能が刺激され成長が促されるのである。また、音感もこの時期が最も敏感である。<sup>5,6</sup>

### (2) 感受性を高める

子どもたちは、物事に対して、ありのままを受け入れることができる純真さを持っている。自然や自分のまわりの美しいものに感動する心、芸術や周囲の事象に対する豊かな感性は、乳幼児期からの体験の積み重ねによって育まれると言えよう。

### (3) 表現能力を高める

音楽の楽しさは、「聞く」ことに留まらず、自ら

「する」ことを通してさらに深まると考える。心身の反応が一致する子どもたちには、音楽を全身で体験することが望ましい。<sup>7</sup> 伸び伸びと音楽遊びができるよい環境作りが大切であり、自由な音楽活動を通して子どもたちの表現能力は高められると言えよう。

#### (4) 社会性を高める

1歳を過ぎる頃になると、子どもは保育士や友だちと一緒に何かをすることを好むようになる。音楽は、いつも一人で楽しむものではない。友だちと一緒に聴き、歌い、演奏し、身体全体で表現する時、その楽しみは倍増する。子どもたちにとって、音楽活動はコミュニケーションの場でもあり、ぶつかり合いや譲り合いを通して協調性も芽生えるのである。<sup>8</sup>

### 4. 乳幼児の音楽的能力の発達と保育内容及び配慮事項

保育所や幼稚園での子どもたちの生活の中には、音楽が満ち満ちている。人間の諸機能の発達は、聴覚から始まり運動能力へと進んでいく。そして、言語の発達にともない「歌う」ことへと発展し、さらに、手を使って音を出すことに関心が進み表現活動へと発展していくのである。

#### (1) 音楽的能力の発達

まず、筆者の保育現場での子どもたちの観察及び、J.ピアジェ<sup>9</sup>、K.スワンウィック<sup>10</sup>、I.O.ウズギリス/J.McV.ハント<sup>11</sup>等、多くの研究者の観察結果を基に乳幼児の音楽能力の発達を考える。

##### 0～6か月未満

生後2～3か月になると、音がする方向へ顔を向け、音を聞いて喜んだり、声を出したりする。音の強弱を感じられるようになる。

##### 6か月～1歳未満

喃語がはっきりしてくる。語りかけや周囲の音に反応し、音の出る物をたたいたり、振ったりして喜ぶ。

##### 1歳

音に対して興味を持ち、音の強弱、高低、リズムを聞き分けるようになる。音楽が聞こえると、体を動かして楽しむ。

##### 2歳

全身でリズム、メロディーを感じ、音楽に合わせて体を動かして遊ぶ。曲を部分的に歌うようになる。

##### 3歳～

3歳頃になると、全身で音楽に反応し、音楽に合わせて歌ったり（まだ音程やリズムは正確ではないが）、手をたたいたり、踊ったりする。何かをしながら、即興的に楽しそうに歌っている。

4歳頃になると、積極的に音楽を聴くようになる。音楽の三要素であるメロディー、リズム、ハーモニーを聞き分けられるようになる。自分なりに音楽のイメージを描き、全身で表現することを楽しむようになる。4～5歳頃から、友だちと一緒に様々な音楽活動を楽しむようになる。

#### (2) 保育内容及び配慮事項

次に、「保育所保育指針」<sup>12</sup>による保育内容及び配慮事項から音楽教育に関する項目を抜き出してみる。以下のことから子どもの成長と音楽がいかに密接にかかわっているかを理解できる。

##### 6か月未満

(内容) 優しく語りかけをしたり、歌いかけたり、泣き声や喃語に答えたりする。保育士とのかかわりを楽しいものにする。

(配慮事項) 玩具などは、子どもの発達に応じて選び、遊びを通して感覚の発達に効果があるものとする。

##### 6か月～1歳3か月未満

(内容) 歌を聞いて楽しんだり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ。

(配慮事項) 優しい歌声や、快い音楽を聴く機会をたくさん持ち、満足感を味わえるようにする。

##### 1歳3か月～2歳未満

(内容) 一緒に歌ったり、簡単な手遊びをしたり、体を動かして遊ぶ。

(配慮事項) 一緒に歌ったりして模倣活動を楽しめるようにする。

##### 2歳

(内容) 一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたり遊ぶ。

(配慮事項) 歌うことや、音楽に合わせて体を動かすことを好むので、子どもに合ったやさしい曲を美しく表現するように配慮する。

### 3歳～

(内容) 3歳頃から、保育士に頼らず自発的に遊ぶようになる。音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、リズム楽器を鳴らしたりして楽しむようになる。4歳頃からは、友達と一緒に楽しむようになる。

(配慮事項) 一人一人の子どもの興味や自発性を大切に、自ら表現しようとする気持ちを育てるようにする。5～6歳頃には、子ども同士の互いの認め合いを大切に、一緒に表現する喜びを体験できるように配慮する。

以上、乳幼児の音楽的能力の発達と保育内容及び配慮事項についてまとめた。また、基本的な音楽活動の素材は、特別なものを用意する必要はないと考える。子どもの日常生活や身近な自然の中から探し、遊びの中から学べる環境を作り、生活の中に音楽がとけ込めるようにすることが望ましい。

## 5. 乳幼児の音楽活動

音楽には、「歌う」「弾く」「動く」「聴く」活動がある。それに、総合としての「創る」活動を加えて述べる。

### (1) 歌う

#### 声域

幼児の声域については、心身の発達状態や音楽的経験等によって影響を受けるため、一概には言えないが、無理なく歌える音域は一般的には1歳～2歳頃はへ～イ、3歳～5歳頃はニ～イ、6歳頃でニ～ニとされている。<sup>13</sup>

#### 教材の選択

声域を考慮することはもちろんのこと、肺活量の少ない乳幼児にとって、フレーズの長い曲やテンポが極端に遅い曲は向いていないであろう。

そして、生活に密着したものを選ぶことが大切である。例えば、①生活の歌、②行事の歌、③季節の歌、④遊びの歌。

また、音楽教育の分野で「わらべうた」と呼ばれる歌の定義は、大人が作ったものではなく、子どもの遊びの中から自然発生的に生まれたものであると言えよう。「語りかけ」や「ひとり言」にリズムがつき、メロディーがついてくる。例えば、「♪もう いいかーい? ♪まーだだよー」「♪○○する者、♪この指止まれ!」「♪あーぶくたった ♪煮えたった ♪煮えたかどうか 食べてみよう……」のような歌のことである。他には、絵かき歌、ジャンケン歌、なわとび歌等がある。これから、子どもたちの間で、新しい「わらべうた」がたくさん生まれることを期待したい。

### (2) 弾く

乳児のうちは、身近にある音の出るものをたたいたり、振ったりして喜んでいるが、3歳頃になると、歌や動きと一緒に楽器を鳴らして楽しんでいる。リズムカルな音楽に乗って体を動かしながら楽器を鳴らす。4歳頃になると、楽器そのものに関心を持ち、曲に合わせて鳴らすとともに、その楽器の奏法に親しむようになる。5歳の頃には、それに加えて、自分で考え、工夫して演奏するようになる。

#### 楽器の選択

まずは、乳幼児が興味・関心を持てるもの、扱いやすいものを選ぶことである。楽器には大きく分けて、①無音程打楽器(リズム楽器)、②有音程打楽器、③旋律楽器に分類される。無音程打楽器には、カスタネット、タンブリン、トライアングル、シンバル、鈴、太鼓、マラカス、ギロ等がある。有音程打楽器には、木琴、鉄琴がある。そして、数ある旋律楽器の中から乳幼児にも扱いやすいものは、鍵盤ハーモニカや小型のキーボードであろう。

どちらの楽器についても、上手に演奏することが目的ではない。まず、触れて、鳴らして、楽しむことが子どもたちにとって貴重な体験である。

### (3) 動く

様々な表現活動の中で、「身体表現」は子どもにとっては最も自然なことであり、人間の本能的

な自己表現手段であると思われる。

好きなように、自由に音楽活動をさせると、多くの子どもたちは、歌いながらリズムに合わせて体を動かしたり、手拍子を打ったりしている。「4. 乳幼児の音楽的能力の発達と保育内容及び配慮事項」の項でも述べたが、生後6か月頃から音楽に合わせて体を動かすようになるのである。

これらのことから、音楽活動と身体表現は非常に密接なかかわりを持っていると言えよう。

#### 身体表現の意義

子どもの音楽教育において身体表現は、最近、注目されている領域であるので、その意義をいくつか述べる。

- ①動くことは、子どもにとって自然で、楽しいことである。
- ②身体表現によって、音楽がより容易に解釈できる。
  - ・手拍子を打ちながら歌うとリズム、テンポがはっきりわかる。
  - ・歌いながらスキップをしてみると、早くスキップが上手になり、同時にそのリズムも体で理解できる。
- ③全身を使うことによって表現力が豊かになる。
- ④心と体を同時に使うことによって心身ともにバランスよく成長する。

#### 指導の方法

ダルクローズ・リトミックが身体表現を中心にした音楽メソッドとしてよく知られている。

- ①歌いながらリズムに乗って手をたたいたり、歩いたり、スキップしたりする。
- ②音楽を聴いて全身を使って自由に表現する。(象やうさぎ、小鳥になって動く。また、風や波、木や花のイメージを体で表現する。)

#### 指導上の留意点

- ①保育士のイメージを押しつけないこと。例えば、象はいつも重そうにゆっくり動くわけではない。子どもは、暴走している象たちや、昼寝をしている象を思い浮かべているかもしれないのである。
- ②子ども同士のコミュニケーションがよく取れるようにする。

#### (4) 聴く

乳幼児にとって、プロの演奏家による生演奏やCDを聴くことが必ずしも最良の方法とは言えない。むしろ「聴く」ことは、親や保育士の子守唄や語り歌から始まり、身近なところにいる母親や保育士の歌や演奏に勝る鑑賞はないといってよいであろう。そのためには、すぐれた表現力を持ち、豊かな音楽体験のある保育士が求められる。とはいえ、特別な訓練を受けた専門家である必要はなく、音楽を愛し、心から音楽を楽しめる保育士が望ましいと言えよう。

#### 曲目の選択

子どもたちが楽しく聴ける曲を選ぶことが大切である。

- ①あまり複雑ではなく、親しみやすいメロディーの曲
- ②リズムカルな曲
- ③あまり長くない曲

を子どもたちは好む。ただし、目的に合わせて臨機応変にすることである。当たり前のことのようだが、筆者の観察によるとクールダウンさせる時でも、常に元気のよいリズムカルな曲をかけている保育所・幼稚園が意外と多いのである。これも保育士の音楽に対する感性の欠如と言えよう。

また、いろいろな種類の曲(歌、器楽、お話と一緒の音楽……)、様々なジャンルの曲等、幅広く選ぶことが大切である。

#### 曲の聞かせ方

聞かせ方には、二つの方法がある。

- ①無意識的に聞かせる音楽、つまり、BGMのことである。
- ②意識的に聞かせる音楽、つまり、
  - ・音楽に合わせて身体表現をする
  - ・音楽を聴いて感じたことを絵に描いてみる
  - ……等、目的を持って聞かせることである。

#### (5) 創る

「保育所保育指針」には“6歳児の保育内容”において、「感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由な方法で、様々な表現

を楽しむ。」とある。つまり「創る」とは、今まで述べてきた「歌う」「弾く」「動く」の各領域において行われるものである。

「歌う」活動の中では、遊びの中で自然に生まれる即興的な歌（ひとり言に独自のリズムや抑揚がついたものも含めて）やリズムミカルな語りかけから始まるものである。

「弾く」活動の中では、簡単なリズム楽器を使って音楽に合わせてたたいたり、水笛や草笛で小鳥の鳴き声をまねしたりしている。また、身近にあるものを使って、音の出るおもちゃを作り、鳴らして喜んでいる。子どもたちは、このように自由に音や音楽を作って楽しんでいるのである。

「動く」では、子どもたちにとっては動くことが子どもの本性であるから言うに及ばない。歌いながら踊ったり、音楽に合わせて体を揺すったり、跳びはねたりして自由に全身を使い音楽表現をしているのである。

以上3つの音楽活動は、当然のことながら、「聴く」とことと切り離して考えることはできないのである。「聴く」ことによって音楽を感じ取り、様々な方法で表現する。また、自分たちで創ったものを、互いに鑑賞しあうことは、子ども同士のコミュニケーションを豊かにするために重要なことである。

いろいろな領域について述べてきたが、これらの活動は互いに密接なつながりを持っている。子どもたちにとって、これらが一体となった音楽活動が最も望ましいと言える。

## 6. 保育士に求められる音楽的資質

子どもの心身の発達に及ぼす音楽の影響は多大なるものである。保育士の役割は、伸び伸びと音楽活動ができるように、よい環境を作り、子どもたちから自由な発想を引き出せるようにすることである。それには、まず、保育士自身が音楽を楽しむ人間でなくてはならない。そして、保育士として音楽を積極的に楽しむためには、ある程度の技術を身に着けなければならないのである。

ここで、全国の保育士試験実地要領<sup>14</sup>を見ると、保育・教育現場で求められる保育士の音楽的資質

が明らかになる。ピアノはバイエル修了程度の技術が求められ、声楽は、弾き歌いに重点が置かれている。それに加えて初見視奏・視唱が入っている。

その他、和歌山県では「楽曲を聞きながら感じたこと、考えたことなどを表現する」身体表現。岡山県、愛媛県のリズム試験。佐賀県の手遊び。熊本県においては、「お話」をしながら、そのイメージを描いたピアノの曲を弾く等、豊かな創造性を必要とする即興演奏が要求される。音楽実技の課題は以上のように、ピアノ等の楽器演奏、声楽に加え、リトミックの身体表現・即興演奏、語りと音楽、等、広範囲にわたる。しかし、どれも保育現場の実情に沿ったものであり、保育士として必要な音楽的資質を試される課題であると言える。それゆえに、これらの課題は、保育園や幼稚園の就職試験と直結するものであることは言うまでもない。

以上のことから、保育・教育現場では保育士に対してかなり高度な音楽的資質を求めていることがわかる。

そして、音楽活動は、ローマックス<sup>15</sup>が言うように、人間が自己と他者との関係において最も基本的であるようなものを表現するための手段だと言ってよいだろう。言い換えれば、子どもと保育士の最も基本的なコミュニケーションの手段として音楽を位置づけることができる。

子どもたちの心に響く、円滑なコミュニケーションをするために、保育士にとって、音楽が果たす役割は大きく、音楽教育の重要性を改めて確信するのである。

## 7. まとめ

音楽の機能、音楽活動の大切さをいかに理解できていようと、保育士に音楽を愛する心がなければ、決して音楽好きな子どもたちは育たない。保育士自身が音楽を楽しむこと、それが第一であることは疑う余地もない。しかし、音楽の楽しさを表現し、子どもたちに伝えるためには、その心に加えて、ある程度の音楽技術が不可欠なのである。ここで改めて、保育士養成校における音楽教

育の重責を思うのである。

シュタイナーは音楽体験について「あらゆるリズム体験は呼吸と心臓の動き、血液循環と不思議な関係を持っている。呼吸の流れを通してメロディーは心臓から頭へ運ばれる。リズムは血液循環の波の上を、心臓から手足に駆られ、手足の中に意思として捕われる」<sup>16</sup>と言い、音楽は人間全体を満たすものだとしている。即ち、音楽は胎児期の成長の基盤になるもの、人間の生命の息吹であると語っているのである。<sup>17</sup>

よい保育士を目指して学習すべきことは、音楽のみならず、限りなくある。何よりも、時間的余裕がほしいが、限られた時間の中で、少しでも多く音楽の楽しさ、「音楽する」喜びを学生たちに伝えられるように努力していきたい。

#### 注・参考文献

- 1 本稿では、音楽大学を除く保育士養成課程を持つ、大学・短大・専門学校等を指すものとする。
- 2 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課、保育士養成課程等検討委員会からの報告「今後の保育士養成課程等の見直しについて」(2001年2月16日)
- 3 同上、「保育士養成課程案」を参照のこと。必修科目「基礎技能(演習)」が、6単位から4単位へと減少。1.音楽に関する基本的な知識や技能 2.造形に関する基本的な知識や技能 3.体育に関する基本的な知識や技能 以上3科目の中、2科目4単位のみ必修となった。つまり、「音楽に関する……」を履修しなくても資格取得において問題はない
- 4 E.ラドシー/J.ボイル、徳丸吉彦・藤田美美子・北川純子訳、音楽行動の心理学、161-164、音楽之友社、2001
- 5 高橋道子編、新・児童心理学講座2「胎児・乳児の発達」、金子書房、68-69、1992
- 6 ジョージ・バターワース/マーガレット・ハリス、村井潤一監訳、発達心理学の基本を学ぶ、ミネルヴァ書房、64-65、1998
- 7 鈴木恵津子、音楽トレーニングにおけるムーブメントの役割—Dalcroze Eurhythmics による音楽解釈—、鎌倉女子大学紀要、1-8、2001
- 8 鈴木恵津子、小学校音楽科における器楽指導の意義とアンサンブル学習の効果—児童の意識調査を基に—、鎌倉女子大学紀要、61-68、1995
- 9 J.ピアジェ、谷村覚・浜田寿美男訳、知能の誕生、ミネルヴァ書房、80-93、163-182、1984
- 10 キース・スワンウィック、野波健彦他訳、音楽と心と教育、音楽之友社、77-97、1992
- 11 I.Ö.ウズギリス/J.McV.ハント、白瀧貞昭・黒田健次訳、乳幼児の精神発達と評価、日本文化科学社、192-198、1983
- 12 厚生労働省家庭児童局、保育所保育指針、1999
- 13 森田百合子他、幼児の音楽教育、教育芸術社、8-9、2000
- 14 紙面の関係で本稿には添付資料として掲載できないが、全国の各自治体による保育士試験実地要領、または「保育士試験・音楽実技」(2001年 資料作成・鈴木恵津子)を参照のこと。
- 15 前掲4、165
- 16 ルドルフ・シュタイナー、西川隆範訳、音楽の本質と人間の音体験、イザラ書房、70-72、2000
- 17 前掲15、52

#### 要旨

保育士養成校においては、2002年度から実施される新カリキュラムによって「音楽」に関する科目が削減される。しかし、音楽は子どもの心身の発達に大きな影響を及ぼし、豊かな人格形成に果たす音楽の役割は大きい。そして、保育士は子どもたちの音楽能力の育成に大切な役割を担っているのである。

本稿では、保育士養成校における音楽教育の重要性について「音楽活動の意義」「音楽の機能」「乳幼児の音楽能力の発達と保育内容」「乳幼児の音楽活動」「保育士に求められる音楽的資質」の5つの観点から論じた。

(2001.10.25 受稿)